

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

イタリア通信 ㊦

* ヴィオラ・ディ・グラード『鉄の子どもたち』* ～ユキの悟りの道～

深草 真由子

思いもよらず、京都への郷愁にさそわれた。『鉄の子どもたち』—過去を引きずりながら迷いと不安のなかで現在を生き、ある出来事をきっかけに、未来へむけて自己の解放を模索しはじめる若い女性の物語。イタリア文壇のホープ、ヴィオラ・ディ・グラードの第三作目の小説である。言葉を尽くして物事を描写するイタリア人が多いなか、ディ・グラードは正反対。俳句のようにエッセンスを凝縮した短文をつかって一瞬を切り取り、印象的な情景を鮮やかに繰り広げていく。脳科学への関心が高いとあってか、心理の描き方も独特である。まだ二十八歳の若さだから、表現スタイルも興味の対象もこれからますます広がって、優れた作品をいくつも世に出すにちがいない。トリノで日本語と中国語を学び、ロンドンで東洋思想を修めた彼女。語学留学で京都に滞在した経験ももつ。そんなディ・グラードが、国内外で高く評価された過去の二作『アクリル70パーセント、ウール30パーセント』『へこんだ心臓』を経て、ついに日本を舞台にした作品を発表した。『鉄の子どもたち』、彼女自身が「これまでで一番」と自負する作品である。簡単になるがその内容を紹介しよう。(Viola Di Grado, *Bambini di ferro*, La nave di Teseo, 2016)

人工知能の活躍する近未来の日本。二十八歳のユキは、京都の児童養護施設でアシスタントをしている。ある夏の日、両親を交通事故で失った

三歳のスミコが施設に保護されることになった。小さな畳の間の一角に座り込み、壁の一点を凝視していたスミコ。京都に到着してからもこわばった表情をゆるめることなく、着替えも食事も嫌がり、部屋の隅に窮屈そうにうずくまっている。しまいには職員たちに問題児扱いされることになるスミコだが、どういわけかユキは彼女に心惹かれている。

Viola Di Grado
Bambini di ferro



Romanzo

La nave di Teseo

【“*Bambini di ferro*”表紙】

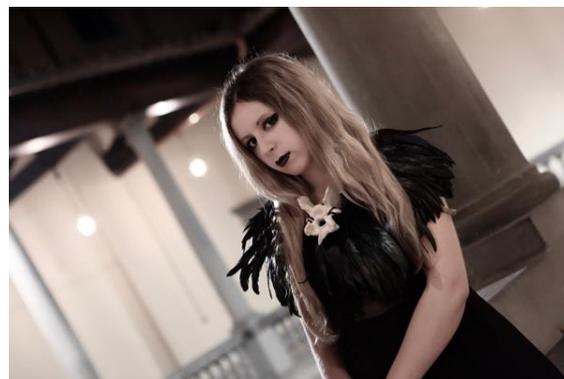
ユキは三歳の誕生日を迎えた日からずっとこの児童養護施設に住んでいる。無計画に彼女を産みおとした実の母に捨てられたからだ。その当時、自殺や犯罪が増え、世の中に不安が蔓延していたため、社会秩序の維持を目的に国家規模である実験が行われることになった。親としての適性に欠く者たちから児童を保護し、政府認定の施設でその成長を管理し、模範的な社会人の育成を目指すものである。子どもを養育するのは、古代インドの仏教思想をモデルにプログラミングされた人工知能。子どもの脳波データを収集、分析することによって最適の子育てを提供するそれは、パーフェクトな母性と謳われていた。三歳のユキの施設での生活はこうして、実験室に据えられた一台の母型アンドロイドとともにスタートした。鋼鉄でできたロボットの硬く冷たい頬、ネオンの光る眼球と人工的な声に、最初はひどくおびえるユキ。だが次第に心を許し甘えるようになると、法華経や華嚴経を朗唱する「母」の優しい声にうっとりし、腹部の扉をぐぐって入る「母」の胎内の温かさに心なやませた。ユキの人工保育は順調だった。

しかし長くは続かなかった。三年後、人工保育反対を訴える浄土真宗の僧たちが、人工知能のシステムにウイルスを侵入させたのだ。本来の機能を喪失したアンドロイドは単なる冷たい鉄の塊となり、東京浄土と呼ばれるお台場の廃棄物処理場に運ばれて解体された。「母」のハードウェア経由でウイルスにさらされた「鉄の子どもたち」は、でき損ないの人間「一闍提(いっせんたい：仏性を欠く極悪人)」と呼ばれて世間から疎まれた。トラウマを抱えた彼らの中には自死を選ぶ者もいれば、社会の危険分子として旭川の収容所に隔離される者もいた。ユキはそんな「鉄の子どもたち」の生き残りの一人。だから「ふつう」の者たちと「ふつう」の日常を共有できない。疎外感に苛まれながら、「母」の唯一の形見、鋼鉄の指一本を心の支えに、施設からほとんど一歩も外に出ることなく二十年を過ごした。

ユキがはじめて親愛の情を抱いた相手スミコはしかしながら、避けつづけていた場所へとユキを引きずりこんでいく、不気味な存在でもあった。あいかわらず隅で黙り込んで、壁をじっと見つめているスミコ。笑顔ともしかめ面とも判別できないグ

ロテスクなその子の表情は、清水寺の秘仏、十一面観音像の、衆生の煩惱をあざ笑う暴悪大笑面のよう。まだ三歳の小さな女の子の放つ圧倒的なオーラに呑みこまれるようにして、ユキは克服したはずの過去にふたたび囚われるようになる。ある夜、悪夢にうなされ目覚めたユキの耳に懐かしい声が響いた。仏の教えを説く「母」の金属的な声だ。また幻聴が始まったのだ。このまま悪化すれば旭川に送られるかもしれない。不安はつもの。

孤独と迷いのなかにいるユキは、スミコとの出会いに突き動かされるようにして、自分の意識の深みを見つめることになる。それは、脳の奥にしまいこんでいた記憶の断片を寄せ集め、過去を再生する、苦悩のプロセスである。彼女が生の実感で心を充たす日は、はたしてやって来るのだろうか。奪われた「母」の愛がアルゴリズムの結果でしかなかったことに気づくとき、彼女の脳裏にビャクダンの薄片とマンダラゲの花々が舞い散る。そのときユキはようやく、悟りの道の入口に立った…。



【Viola Di Grado】

出典：<http://www.violadigrado.com/>

ユキの孤独な歩みは、誕生と同時に母を亡くしたブツダの物語と混ざりあう。いどこにして愛弟子のアーナンダに方便でもって真理を教えたブツダは、そのアーナンダを裏切らないために死を選ぶ。肉体の束縛から解かれ自由になったブツダの魂が地球の中心で発見する、熱く燃える鉄のマグマ。そしてその熱が広大な宇宙を温めているようす。それは、「鉄の子どもたち」が無限の可能性と巨大なエネルギーを秘めていることを教えてくれる。

「日本はわたしの魂の住処」と、ヴィオラ・ディ・グラードは言う。彼女が『鉄の子どもたち』で描い

『素晴らしき自転車レース 26』

歌の中の自転車レース

谷口 和久

昔の自転車レースのことを調べるのに大いに役に立っているのは youtube など、動画サイトの存在だ。古くは第一次大戦前後のジラルデンゴやビンダの時代から、コッピやバルタリなど、往年の名選手たちが実際に走っている様子を見ることができるとは、ひと昔前なら考えられないことだ。

昔のレース映像を見ていて気がつくことのひとつに、観客たちの「お行儀の良さ」がある。田舎でも男性はみな着帽、ジャケットなどでおめかしして、いうなれば自転車レースが「ハレ」の日の催しだったことがうかがえる。今はほとんどTシャツ、短パンだ。

それに沿道の観客たちも整然と並んでいる。こんにちのレースでは当たり前にもみられるような、押し合いへし合い選手の進路を妨害したり、カメラやスマホをつきだしたりなどの危険行為は皆無だ。

イタリア人に聞くと、次のように話してくれた。

「昔と今とでは、教育が変わってしまったんだ」

「それに、昔は自転車レースにたいして、みんな尊敬の念を持っていたんだよ」

かつてはサッカーと人気を二分するほどの存在だった自転車レース。サッカー選手が昔からどちらかといえば「お高くとまった」存在であったのに対し、自転車選手は親しみやすく身近な存在だったという。

物理的にも数10センチも離れていない、手を伸ばせばさわれるほどのすぐ目の前を選手たちは走っていく。心理的にも近しく気さくな選手たちは、それだけに尊敬の念も抱ける対象だったのだろう。



【1925年ジロの様子 走るのはジラルデンゴとビンダ】

出典元：<http://www.bikeraceinfo.com/photo-galleries/rider-gallery/girardengo-costante.html>

動画サイトでは脇に関連動画というのが表示される。見ると、コッピやバルタリが歌の題材になっているものもあるではないか。

まずはファウスト・コッピの歌を見てみよう。歌うのはイタリアの人気シンガー・ソングライター、ジーノ・パオリだ。

“Coppi” Gino Paoli

Un omino con le ruote
contro tutto il mondo
Un omino con le ruote
contro l' Izoard
e va su ancora
e va su

世界に立ち向かう自転車小僧
イゾアル(*1)に立ち向かう自転車小僧
さらに高みへ
高みへと

(*1: ツール・ド・フランスの舞台となった峠)

Viene su dalla fatica
e dalle strade bianche
La fatica muta e bianca
che non cambia mai
E va su ancora
E va su

苦難から身を起こし、ダートから身を起こし
変わることはない、沈黙の苦難
さらに高みへ
高みへと

Qui da noi (*2) per cinque volte
poi due volte in Francia
Per il mondo quattro volte
contro il vento due
Occhi miti e naso che divide il vento
occhi neri e seri
guardano il pavé

ジロで5勝
ツールで2勝
世界選手権では4勝
タイムトライアルで2勝
神秘的な目と風を切り裂く鼻
コースを見つめる漆黒の真剣なまなざし
(*2 “da noi(私たちの所)、つまりイタリアのことを
指している)

(以下略)

参考動画：

<https://www.youtube.com/watch?v=Nnr2TZ2JKvs>



【山道を行くコッピ(左)とバルタリ】

出典元：<https://lagazzettadellabici.wordpress.com/2010/06/27/coppi-and-bartali-in-the-greatest-ever-cycling-photograph/>

コッピの曲調がどこか悲しげなのにたいし、

バルタリの方は底抜けに陽気だ。それぞれの人生やキャラクターをあらわしていて、なんとも興味深い。こちらもイタリアの人気シンガー・ソングライターであるパオロ・コンテが歌っている。

“Bartali” Paolo Conte

(前略)

Oh, quanta strada nei miei sandali
quanta ne avrà fatta Bartali
quel naso triste come una salita

このサンダルでどれだけの道を歩いてきたか
バルタリもどれだけの道を走ってきたことか
のぼり坂のような かなしげな鼻をして
(以下略)

参考動画：

<https://www.youtube.com/watch?v=xX38syzoswE>

歌の内容はバルタリその人をうたっているわけではなく、バルタリの応援にツール・ド・フランスを観に行ったカップルが痴話げんか(?)をしているという内容なので、自転車ファンのには(歌詞自体は)それほど面白いものでもなく、また意味を解釈するのも難しいのだが、フランス人の観客たちをこきおろしているのがいかにもだ。(そのへんは放送禁止用語?だらけのため割愛)

ユニークなのはジラルデンゴの歌。こちらはタイトルが「悪党とチャンピオン」となっている。悪党とは、ジラルデンゴと幼なじみの、義賊にして無政府主義者であったサンテ・ポラストリという人物のことである。

ジラルデンゴとポラストリは、ともにピエモンテ州ノーヴィ・リーグレの生まれで、年の差は6才。はっきりしたことはわかっていないが、幼いころから遊び仲間だったそうで、一緒に自転車に乗ることもあったようだ。

ジラルデンゴが自転車乗りとして一流になったのにたいし、ポラストリはいつしかずさんだ

生活を送るようになり、警察に追われる身となった。イタリアだけでなくフランスでも強盗などの犯罪に手を染めたが、狙うのは金持ちや高級宝飾店などの上流階級ばかりで、貧しい人たちには盗んだ金品を分け与えたりしていた。いふなればイタリア版ロビン・フッドだ。

パリに逃亡したポラストリは、現地でレース中のジラルデンゴと会ったりして、のちに裁判にかけられたときにはジラルデンゴが証人台に立ったこともあったという。



【TVドラマ「悪党とチャンピオン」の一場面】

出典元：https://it.wikipedia.org/wiki/La_leggenda_del_bandito_e_del_campione

ふたりのエピソードは本となり、のちにTVドラマ化された。そのときに作られたのが、こちらの歌である。歌うのはイタリアン・ポップスの雄フランチェスコ・デ・グレゴリーだ。

“Il bandito e il campione” Francesco de Gregori

(前略)

Vai Girardengo vai grande campione
nessuno ti insegue su quello stradone
Vai Girardengo non si vede piu' Sante
e dietro a quella curva
e' sempre piu' distante
e dietro la curva
del tempo che vola
c' e' Sante in bicicletta
e in mano ha una pistola

行けジラルデンゴ 行け偉大なチャンピオン
誰も追いつくことはない

行けジラルデンゴ

もはやサンテ（ポラストリ）も見えやしない
アタックすればカーブの向こうに距離もひらく
サンテがいるぞ 手にピストルを握って
(以下略)

参考動画：

<https://www.youtube.com/watch?v=oX0ZBjcECPo>

最後は、近年でもっとも人気のあった自転車選手マルコ・パンターニに捧げられた歌。タイトルは「そしてペダルの上に立ちあがる」(Emi alzo sui pedali)。

“E mi alzo sui pedali” Stadio

(前略)

E ora mi alzo sui pedali
come quando ero bambino
Dopo un po' prendevo il volo dal cancello
del giardino
E mio nonno mi aspettava senza dire una parola
Perché io e la bicicletta siamo una cosa sola

そしていま僕はペダルの上に立ちあがる
子どもの頃のように
庭の柵から飛び立つのさ
おじいさんがなにも言わずに待っていてくれた
なぜなら ぼくと自転車は一体だから
(以下略)

参考動画：

<https://www.youtube.com/watch?v=Vz00DC3X7cs>

パンターニに続く「歌に歌われるほどの自転車選手」が出てくることを願うばかりだ。

(当館スタッフ)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>